

# 今が見える学校図書館の構築

放送大学客員准教授 塩谷京子

## 1 教科書の教材をじっくり読んでみると・・・

国語の教科書を見ると、小中学校問わず、グラフや表が目につきます。統計資料の使い方を学ぶ単元もあります。また、算数・数学では「データの活用」という新たな領域が加わり、日常目にする「棒グラフ」「折れ線グラフ」「円グラフや帯グラフ」だけでなく、分布（散らばり）を表す「ヒストグラム」「箱髭図」も学びます。

国語の平和教材は、戦争の悲惨さなど過去の出来事を学ぶだけではありません。叙述をもとに登場人物の心情を想像し、行った場所や出会った人から伝わったことをもとに、登場人物がこれからどう生きようとしているのかまでも想像し、その上で、自分は何を大切にしていきたいのかを考えるとところまで、視野に入れた単元構成となっています。

中学校社会科の公民の教科書には、「レアメタル」「フェアトレード」「食品ロス」「ハラル認証」「モノカルチャー経済」「バイオエタノール」など、今の時代を反映した言葉が満載です。さらに、国語の教科書には、「フェアトレード」「食品ロス」などのテーマをもとに、資料から読み取ったことを比較したり関係付けたりして考えをまとめ、書いたり話したりする単元もあります。

## 2 子供の学び方は・・・

タブレットが導入され、児童生徒は手元で情報検索ができるようになり、知りたいな、どういう意味かなといったちょっとした疑問は、その場で解決できるようになりました。また、タブレットの中にはベン図やYチャートなどの思考ツールも入っており、情報収集しながら思考ツールに書き込んでいくことができます。

思考ツールに書き込むと、周りの友達に話したくなるので自然に対話が始まります。友達はどういうふうにしたのかを知りたいときには、タブレット上で友達の考えを読むこともできます。タブレット上で、グループの考えを編集できるようにもなっています。もちろん、他のグループの考えも見ることができます。

### 3 本、それともインターネット？

このような状況の中で起きやすいのが、本それともインターネットという論点です。既に時代は、併用が当たり前です。例えば、パンフレットにはQRコードがついており、目的に応じて選んでいます。紙の本と電子書籍の両方で出版されています。どちらを選ぶのかは、本人次第です。

本とインターネットの長所短所が議論されますが、児童生徒は何を見て（読んで）いるのかについても、問題視する必要があると考えます。例えば、「食品ロス」のテーマをもとに、データから読み取ったことを比較したり関係付けたりして考えをまとめ、書いたり話したりする単元（東京書籍 5年生国語）を見てみましょう。この単元で扱われている図表の出所は、農林水産省、環境省、国民生活産業・消費者団体連合会です。つまり、教科書に掲載されている資料は、どこが調査した結果なのか「出所」（一次資料）という表記で子供に示されています。

### 4 資料から読み取るとは・・・

出所（一次資料）が示された資料をもとに、その資料のどこに着目して考えをまとめるのか、また、考えたことを伝えるには、資料をどう使えばいいのかを、この単元で学びます。「もう少し新しい資料が欲しいな」「他にもどういう資料があるのだろう」と思えば、子供は出所（一次資料）を参照し、検索することができます。

資料と言っても、グラフや表、文章、写真や絵など、その形態は多様です。グラフや表からどのように読み取るのかは、主として算数・数学で学びます。その一方で、文章（連続的テキスト）や写真や絵など（非連続的テキスト）からどう読み取るのかは、国語で学びます。ある資料から読み取ったことと別の資料から読み取ったことをつなげて考えると、「～に気づいた」「～ことが言える」「～だろう」というように、自分の意見（考察）が生まれてきます。このように事実から意見を導くことも国語で学びます。

### 5 問題にしたいのは・・・

このように、資料をもとに自分の考えを述べるためには、一次資料が必要です。しかし、本やインターネット上は、①一次資料もありますが、②出所（一次資料）を明記して意見を述べているものや、③いくつかの一次資料を収集し、それらをまとめて意見を述べ

ているもの、さらには、④他の人の意見を再編集し、自分の意見を述べているものなど、児童生徒から見ると**一見区別がつかない状態で混在**しています。インターネット上には②③④も多く、出所が明記されていないものもあります。特に問題にしたいのは、**そこで述べられている意見を読んだ児童生徒が、あたかも自分が気づいたことのように書いてしまう**ことです。

だからこそ、「本それともネット」という議論の前に、子供が見ている資料の吟味が必要であると考えます。教員は、本であれネットであれ、出所（一次資料）がどこなのか、いつの資料なのかが見える資料を子供に提供することが必要です。学校司書は、**テーマに対し一次資料がどこにあるのか**を見極め提供するという支援ができます。司書教諭は、教科や教材を視野に入れ、双方をつなぐ役割があります。

## 6 他人の考えと自分の考えを区別したいときには・・・

児童生徒が学びたいことは、書かれていることを鵜呑みにするのではなく、資料をもとに読み取り、自分の考えをまとめることです。だからこそ、子供が手にした本やネット上の情報は、どのような情報なのかを吟味する視点が指導者に必要です。

また、他人の考えをもとに自分の考えを述べることは大切なことであり、他人の考えを鵜呑みにしてあたかも自分の考えとすることとは、大きく異なります。

「この資料では< >と考えを述べているが、自分は～に考える。なぜなら～」

「この資料では< >と考えを述べている。自分にも似た体験がある。例えば～」というように、**自分の考えと他人の考えを区別したいとき**、< >に、他人の考えを書くことができます。その方法として**要約と引用**があります。引用と要約という方法を学ぶのも国語です。

## 7 子供の近くに本も・・・

1人1台のタブレットが導入され、授業での活用が進んでいます。知りたいことをすぐその場で検索できるようになった今、どんな要望が学校図書館に来るのでしょうか。

例えば、A小学校では、タブレットですぐに調べる習慣がついてきているからこそ子供の身近に図書を置きたいという先生方の願いに取り組んでいました。学校司書がブックトラックに単元に関係する図書を乗せて、教室や学年の廊下に配置していました。子供の近

くにタブレットと本があると、自然に両方に子供の手が伸びていました。本とタブレット（または、スマホ）は相違点も多くありますが、情報を伝える媒体という共通点があります。知りたいことを調べるだけでなく、何となく知りたいと思って読むことは、本でもインターネットでも、同じようにしています。本が近くにあれば、より手に取りやすくなります。

例えば、B小学校では、統計資料の使い方を学ぶときに、教科の観点からの資料だけでなく、子供の身近な資料も欲しいという先生の要望がありました。自分が興味のあることを表したグラフなら興味をもって見てくれるのではないかと先生が考えたのです。そこで、司書教諭と学校司書は、「日本のすがた」「朝日ジュニア学習年鑑」に加え、犬やねこ、鉄道の統計など、図書館にあるの中から子供が興味のあるテーマのグラフを探して、提示していました。子供が興味をもちそうなグラフを探すときには、図書館の本は類別に配架されているため、探しやすかったと話していました。

このように、「本をもっと子供の近くに！」という取り組みは、タブレットが子供の手元にあるようになってから、よく目にするようになりました。

## 8 まとめ

現代社会の中で生きている私たちの視点は、**今、そしてこれから**にあります。総合的な学習の時間のテーマや、国語で報告文や意見文を書くときのテーマは、現代社会が抱える問題でもあります。学校図書館は、こういう学びをしている子供たちや先生方を支える場として、**より新しい今が見える資料**をどこから収集し、提供していくのかを検討していく必要が出てくると考えています。